MARUSHO
株式会社 丸庄

丸庄（印刷）

街道の老舗 ⑤⑧ 千住

ようやく日光街道最初の宿場・千住宿です。荒川と隅田川の二つの流れにも挟まれ、人と物が集まる場所でした。公儀の市場である千住青物市場（やっちゃ場）もあり、「千住葱」専門の問屋が今も数軒あります。

そんなにぎわいをとどめる宿場町商店街に、今回訪ねた「丸庄」はあります。

お話してくださったのは当代九代目の佐々木正一さんと、会社を引き継ぐ予定の鈴木成幸さんです。

「1818年（文政元年）に『丸屋』の屋号で創業した和紙問屋でした。千住にも7軒ほどあったようで、読み終えた黄表紙などの古紙を主に扱っていたと思われます。これからは和紙の時代じゃないだろうと、先代の父が1928年（昭和3年）に丸屋の中に印刷部を立ち上げてからも、あと少しで100年になります」

印刷は時代の潮流に乗り、事業を拡大。太平洋戦争時も、業績を落とすことなく好調で、活版印刷では東京有数だったそうです。しかし戦後、各地で起こった労働争議が、ここにも飛び火します。

「今、上場している企業はうまく乗り越えてきたのでしょうが、先代はやり方を間違えたのでしょうかね。倒産寸前になって縮小を余儀なくされ、現在の本社の土地もそれまではうなぎの寝床のように裏の道までつながっていたのが半分ぐらいになりました」

そうはいっても、55年に「丸庄印刷」の名で会社組織になり、そこから続く高度経済成長期に業績を固めていきました。「丸庄」は、七代目まで丸屋庄兵衛を襲名していたところからつけた社名です。

「斜め前に江戸後期に建てられた横山家住宅が残っていますが、昔はうちも同じような建物で、古文書など古いものもありました。しかし工場が手狭になり、2階に重い鉛の活版を移したら、太い大黒柱や梁にヒビが入ってきて、次に大地震がきたら危ない状態に。それで建て替えることになったのですが、父も私もあまり執着がなく、解体屋さんに丸ごと処分を頼んでしまいました。歴史があるので、きっと貴重なものもあったのでしょうが……」

残っている写真を拝見すると、昭和の印刷屋さんの懐かしさがそのままです。

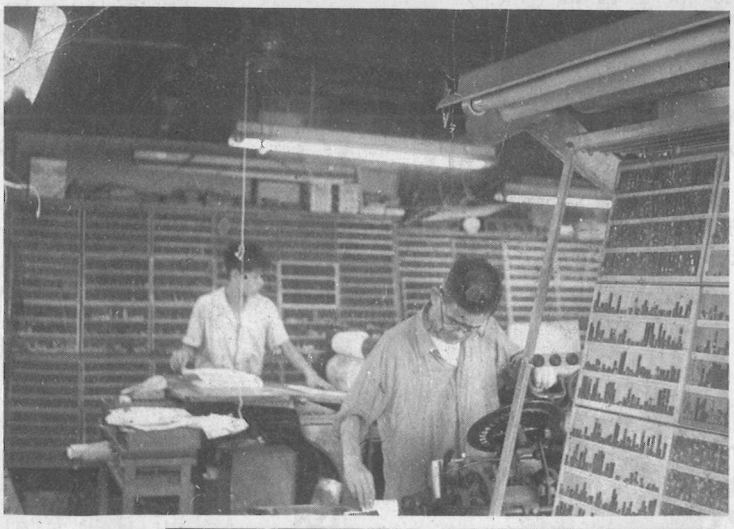
「現社長が就任した95年（平成7年）に私は入社したのですが、当時はまだギリギリ写植機もありました。しかし、そこからの印刷技術の移り変わりはものすごいものでした」と鈴木さんは振り返ります。筆者も執筆者としてその時代を過ごしてきたので実感を共有できます。

活版印刷からオフセットに。文字も活字が写植になり、電算写植になり。写真印刷の方法も大きく変わりました。そして今ではDTP（＝デスクトップ・パブリッシング）というぐらい、ほとんどの作業が普通のパソコンでできるようになってしまいました。

「今や、商業印刷に〝職人〟はいないと言っていいと思います」

鈴木さんはおっしゃいますが、かつては各工程に専門の技能者がいて、印刷物のクオリティーが保たれていました。それが、印刷業界のトレンドは「無人化」だといいます。

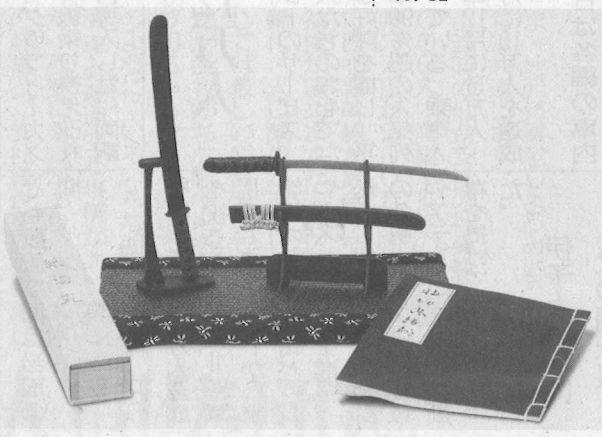
一方で、丸庄では「紙で紙を切るペーパーナイフ」を、と日本刀の形の『紙切丸』を作っています。素材は剣道の防具の一部にも使われている丈夫で固い紙で、刀身、鍔、柄、刀掛けに至るまで、全て紙でできています。開発段階から社員の手で行い、製作も手作り。神刀「神切丸」伝説



㊤出来栄えと速さが職人の腕に託されていた昔の印刷所 ㊨2007年、川口に新設した工場。自動化された印刷機械が印刷所のシーンを変えた

紙のDNA忘れず 印刷変革

「紙」へのこだわりから生まれ、由来の和綴じ本まで作ってしまった『紙切丸』



の和綴じ本も作り、その袋とじを紙切丸で切り開きながら読めるという凝りようです。

「丸庄の原点は『紙』なんだという軸足をしっかり置いて、多角化など業態を変えるにしても、もう片方の足で届く範囲を見極めていこうと考えています」

社長がこのように気持ちを定めるのには、2001年に社員から新しい会社名を募集した経験が影響しているようです。

当時、流行の横文字になるだろうと予想していたところ、丸庄印刷から「印刷」を取って「株式会社丸庄」に。丸屋庄兵衛のDNAを引き継ぎたいという社員の多数意見を入れて社長が決定したのだそうです。

200年余り続いた佐々木家による経営を、同族でない鈴木さんに譲ろうとしていることにも「あまり心配していない」とおっしゃいます。

鈴木さんも「いいスタッフがいるので、彼らが一緒にやってくれれば新しいものを生み出して生き残っていけるし、人も集まってくると思います」と静かに語ります。

社長が「ごく普通の印刷屋で、宝は人しかいない」とおっしゃる中に、200年にわたり、人がつないできた時の強さを感じ取ることができました。

「旅・食・人」のライター
柳澤 美樹子

❖❖❖

丸庄＝電話03（3881）2131

文化